

# 発達領域における IT活用支援①

## IT活用支援とは

Kenichi KAMOSHITA

鴨下 賢一\*

### 1 IT活用支援とは

IT (information technology) とは、情報関連技術のことであり、コンピューターを核としたハードウェア、ソフトウェア、システム、インターネットなどの通信、携帯電話、今はやりのスマートフォンなどの携帯情報端末などの技術を指します。IT活用支援では、その技術を活用して、障害のある人たちの生活を支援します。

支援していくためには、障害の状態や特性、生活やニーズに合わせた機器の選定や設定、環境の調整を必要があるために、専門的な知識と技術が必要となります。作業療法士 (OT) は、福祉用具の専門家として IT活用支援についても早い段階から取り組んでおり、作業の方法や環境を工夫することによって、その方の望む生活の向上を目指した支援を行うことができます。2005年9月26日「障害者のIT活用支援の在り方に関する研究会」報告書5. 障害者のIT活用支援事業の具体化に向けた提言の中でも、「リハビリテーション分野の専門職である作業療法士、理学療法士、言語聴覚士、社会福祉士等と、密接に連携しながら、IT支援を進めることは重要である。その中でも、IT支援を本来業務として進めやすいのが作業療法士である。すでに、作業療法

士が、地域におけるIT支援の核になっているケースも多い」と述べられています。

OTが関わる意義として重要な内容としては、治療的な意味合いでの活用支援ができることと、二次障害を防止することができることにあります。

### 2 IT活用支援でできること

たとえ重度の障害であっても、コミュニケーションをとったり、文字を綴ったり、絵を描いたり、ネットサーフィンを楽しんでお買い物をしたり、ゲームをしたり、学習をしたり、テレビを見たり、ビデオを操作したり、またはインターネットで株取引をして大金持ちになることもできます。また、ベッドや照明やカーテンなどの環境を操作したりと、無限の楽しみや生きがいを提供することができます

### 3 IT活用支援の対象者

身体障害だけでなく、高次機能障害も対象となります。発達領域においては、脳性麻痺や筋ジストロフィーなどの肢体不自由児、自閉症スペクトラムや学習障害や注意欠陥多動性障害などの発達障害などが対象となります。

### 4 発達領域のIT活用支援の特徴

IT活用支援というと、難病の方に対する「重度障害者意思伝達装置」をイメージされやすいと思いますが、難病の方々は一度獲得した機能が低下したり、喪失していく過程をIT活用支援で補償していこうというものですが、発達領域におけるIT活用支援は大きく異なります。

発達段階にある子どもたちの、運動・認知・言語・対人関係の発達などを、遊びなどの活動を通じて促しながら、将来を見据えた支援が必要となります。幼児期には、遊びやコミュニケーションを中心に、学齢期には遊びから学習へ、思春期以降には就労や社会参加に向けての働きかけが必要となります。

\*静岡県立こども病院、作業療法士

0917-0359/12/¥400/論文/JCOPY

## 5 発達領域の IT 活用支援の流れ

### 1. 相談・依頼

誰からの相談・依頼なのでしょう？ 当事者なのか、養育者なのか、通う施設の職員なのか、学校の教員なのかなど、さまざまです。

当事者の生活の場はどこでしょうか？ 家庭なのか、保育園なのか、学校なのかなど、こちらもさまざまです。

### 2. インテーク

相談の依頼者から話を聞きます。相談に至るまでの経過を確認し、生活環境を十分に確認したうえで、何を求めて相談したいのかを把握していくことで、当事者の特性を把握することができます。

ここで重要となる視点が3点あります。1つ目は「観察者としての視点」で、対象者の全体像を捉えます。2つ目は「対話者の視点」で、願望や要望を十分時間をかけて聞き出します。3つ目は「共感者の視点」で、対象者の世界を支援者がどこまで捉えられるかであり、非常に重要な視点となります。

### 3. 身体特性の把握

当事者の身体機能を把握します。姿勢保持具などを利用しているのであれば、そちらも併せて把握していく必要があります。

### 4. 認知・言語・学習能力の把握

当事者に因果関係を把握する力があるか、コミュニケーション能力はどうか、学習能力についても必要に応じて、担任教師などから情報を集めて把握します。

### 5. 遊びなどの好みの把握

好きな遊びはどのようなことでしょうか？ それらは玩具だけではなく、感覚遊びや好きな食べ物なども含みます。逆に、嫌いなことを把握していくこと

も重要になります。

### 6. 処方・機器の選定

把握した対象者の情報から、適切と思われる機器などを選定します。機器は、手持ちになればデモ器を借りたりして、実際に何度も試して使うことが重要です。

また、実際に使う環境を想定したり、その場所で支援者と共に使ってみることも必要となります。

### 7. フィットティング

実際に使用している場面を観察して、長時間楽に使用できているか、効率よく使用できているかなどを確認します。スイッチなどを身体に装着する場面などは、発赤や傷ができていないかも確認します。

### 8. 活用

どのような環境で、いつ、どのような場面で使用するかを把握します。

### 9. 活用の評価

安全に有効に活用できるように、使用頻度や使用時間や目的などを評価します。機器が使われていない場合は、その理由を確認し、使用する環境や支援者の状況、当事者のニーズや生活環境などを再度確認していく必要があります。

### 10. 結果のフィードバック

IT 活用を導入して良かった点、改善が必要な点、発達の変化や障害の度合いの変化に対応するために定期的なフォローが必要な点などを、当事者や支援者に伝えていく必要があります。

## 6 おわりに

これから 11 回のシリーズで発達領域の IT 活用支援について紹介していきます。OT が行う発達領域の IT 活用支援の可能性や重要性を知っていただきたいと思います。

### 参考にしてほしい文献など

- 1) 鴨下賢一, 清水功一郎, 高田政夫, 他: 障害者 IT 活用支援ガイドブック. (社) 日本作業療法士協会, 2008
- 2) 宮永敬市, 田中勇次郎 編: 作業療法士が行う IT 活用支援. 医歯薬出版, 2011